

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 1

氏名

工杯 奈央

美術館名
いくつでも

道立近代美術館、三岸好太郎美術館

一行

上記の他にも道外の美術館や博物館に行ったことはあるのですが、如何せん年齢が幼すぎて記憶がおぼろなので割愛させていただきます。上記2つは、高文連の大会で研修の一環として見てまわった美術館です。道立近代美術館で一番鮮明に憶えているのは、記憶が新しいせいもあるでしょうが「レオナルド・ダ・ヴィンチと『アンギアーリの戦い』展」です。恥ずかしなから「アンギアーリの戦い」について全く知識が無い状態で展示品を見てまわったのですが、それでも十分に楽しめました。未完成のダ・ヴィンチの絵に基づいた様々な画家達の戦争画が中心の展示会でしたが、似た構図・題材でも、間違いなくそれぞれの個性が発揮されており、1つ1つの絵に見入ってしまいました。多少のフケラルさを欠きながら美しさを追求した絵画らしい作品もあれば、人物達のけわしくみじくい表情がありありと描かれた戦争の臨場感溢れる作品もありました。とはいえ私たちがのように日常的に美術と触れ合っている人間ならともかくほとんど興味関心の無い人が楽しめるのかと聞かれれば、難しい所だと感じました。（美術の心得の無い人には難しい絵画はわからない」と言っているのではありません。絵に簡単も難しいも無いと思っておりますし、考えずとも感じられるところが芸術の魅力だとおもっています。ただ、趣旨ごと否定することになってしまうかもしれませんが、同じような構図の同じような油彩画が並べられた美術館に来た時、例えば私がもっと幼ない小学生たよりしたら存分に楽しめるだろうか、と思ったのです。）しかしながら特別展として設置されていた、ダ・ヴィンチの過去作品や名言、また発明品などのコーナーは、非常に入っていきやすく、子供も大人も楽しめる内容になっていました。色々な方面から、ダ・ヴィンチの魅力に迫れるような作りなのです。そういった展示のメリハリの効果についても考えさせられた体験でした。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 2

氏名

鈴木 彰悟

美術館名
いくつでも

トリックアート美術館

上富野のトリックアート美術館は私が生まれて初めて行った美術館だった。確か最初に訪れたのは小学校低学年の頃、父と母と家族三人で富野を旅行した時だったと思う。初めてあの場所を訪れた時、まずはその外観に度肝を抜かれた。外壁全てを覆うトリックアートだ。遠目で見れば、いや、駐車場から見ても古代ギリシアの神殿がポツンと建っているようにしか見えな。しかし、近づいて見れば確かに平面の壁なのだ。白い立派な柱も、巨大な彫像も全てが平面に描かれた絵だった。幼い私は大いに混乱したが、同時に大いに興奮し、熱狂した。「こんな魔法みたいな絵があるのか!」と。当時の私は勿論芸術の良し悪しなんてわからなかったし、トリックアートどころか普通の油彩画を見たこともなかったのだが、それでも初めてあの美術館に入った時はとても感動したことを覚えている。トリックアート美術館はある意味で普通の美術館よりも大衆向けで娯楽的な要素が強い場所だと思われがちで、実際のももそう思っている口だが、それは何も悪いことではなく、幼少の私の代りであったように、小さな子どもがアートの絵と接するファーストコンタクトの場所としてはこれ以上なく適しているように思える。小さな子どもだけではない。何の知識も持ち合わせていなくても楽しめるという点は、それだけ「キッカケ」として強い力を持っている子ということだろう。トリックアートを目にした子どもは、まず純粋に作品のギミックを楽しんだ後、「どうやって描いたのだろうか?」「どういう仕組みなんだろうか?」と、思って絵に近づき、まじまじとそれを見つめるに盡い。少なくとも、私はそうだった。そして、きっとその体験は何か良いものをたらしてくれる。純粋な探究心の成長か、絵に対する興味か、その両方か。あるいは、もっと実素子もない何かを。私は今でもトリックアート美術館が大好きで、一年に一回は必ず訪れる。別に展示が増えているわけでもないが、あの場所に行くたびに何かを得られる気がするのだ。そして願わくば、あの日、初めてあの場所を得た感動を、探究心を忘れないように日々を過ごしたい。

(続けて裏面に書いても良いです)

本当にごめんなさい
用紙を間違えました
本当に本当...おみずせん

館体験

美術感想文

手書きする

提出日：5月28日

○印

図

A B C D E F

点を提出しました

学生番号 8223 氏名

永井 志聖

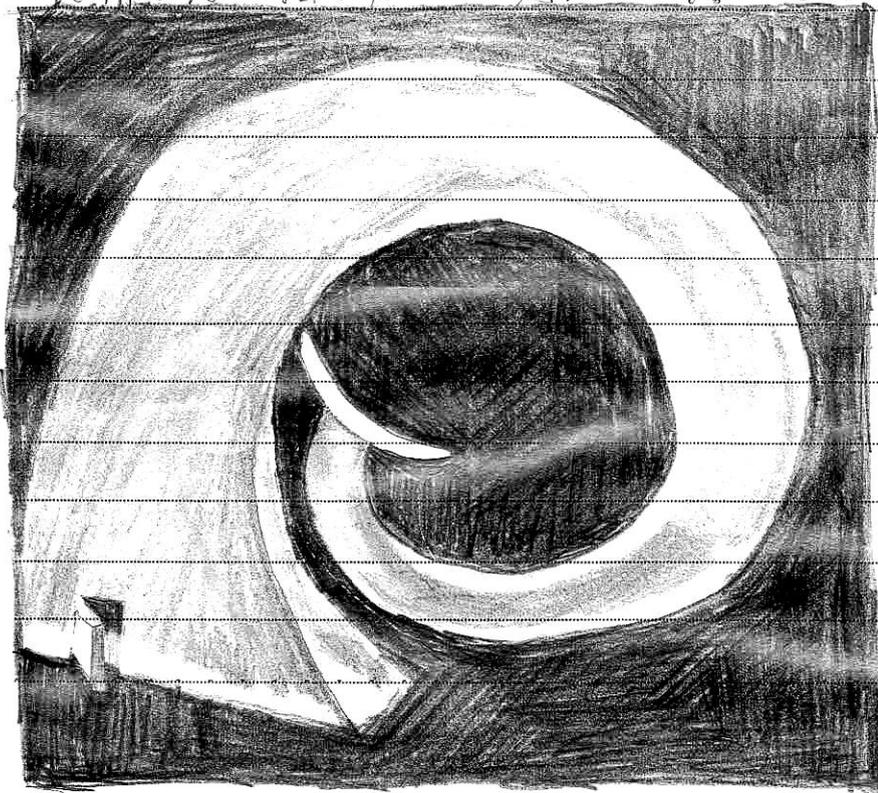
タイトル

作品の題名が解った人は、それを記載する。 わからない人は「自分で考えたタイトル」を委細する。

夜と出会う、夜を見る (近代美術館)

一行目

私は、ここの北海道教育大学岩見沢校合格のために、2月の頭に母親と2人で札幌近代美術館で当時展示開催されていた開館40周年記念ワンダー☆ミュージアム「夜と出会う、夜を見る」を見に行ってきた。館内に入ると上記の展示と高倉健さんの追悼特別展が開催されていて、私は北海道にゆかりのある高倉健さんの展示の方に行きたかったのだが、母に嫌と言われ残念ながら行くことができなかった。それはさておき、「夜と出会う、夜を見る」の展示ブースに入っていくと、まず最初に我々を出口がえてくれたのが、塩谷直美さん作《月の宮》である。この作品の第一印象は「透明な月」であった。しかしよく見るともう1つ弧を描いた先に、小さな三日月がっっているではないか。そして、何であるかが、透明な月と、星のようなものがっっていた。知っているようで知らない世界を表現しているのであろうか。この作品からは美しさ、悲しさ、不安、など、見ていると色々な感情を思い描いたことを覚えている。この展示ブースをひと通り



周って感じたことは、「月」が入っている作品が非常に多かったことだ。「月」というものは平安時代の書物にも登場しているように、我々日本人にとってとても趣き深い存在として幼い頃から知らず知らずのうちに心身に根付いているのかもわからない。

ここまでに取りめること (裏面には書かない)

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 4

氏名

青木 葉生

美術館名
いくつでも

芸術の森美術館

一行目

私が印象に残っているのは、芸術の森美術館で開催された「新海誠展」です。新海誠という名は、やはり君の名はを思い浮かべるとか多いと思います。私も「君の名は」は映画館で見ましたが、他の作品はテレビで何回か見たことがあります。なので、今回の展示も「君の名は」がメインなのだろうと思っていました。

私の最寄り駅は新札幌なので、美術館に行くまでがまず大変でした。そして、とついたら思った美術館が小さい建物でした。本当にここであっているのか、とか、1時間も前から見終わりそうだなあとか思っていました。あまり期待はしなかったです。しかし、私の予想は大きく裏切られました。まず展示の仕方なのですが、四角い部屋がいくつもつながっているような形式で、曲がり角が多かったです。なので、曲がってみるまで何があるのか分からないうきどきどきを、見る側に無意識に感じさせる作りでした。展示は主に新海さんのこれまでの作品を年代順に追っていく、という作りで、その当時作っていたパソコンや映画にでてくる飛行機やバイク(カブ?)の模型なども置かれました。更にそれぞれの映画のブースの壁に、作中の登場人物のセリフが書かれていて、映画を見たことがなくてもこのセリフはどんな場面か誰か言ったのだろうと想像することかできました。

そして私が最も印象的だったのは、「言の葉の庭」のブースでした。この作品は、8.9割が雨の降るシーンが描かれています。なので室内は暗めで、様々な場面での雨の情景が流れています。一見するとつまらなく思えるのですが、そこで客の足を止めさせるために、この展示室では入って初めて「イス」が置かれました。そのエリアは後半の方にあつたので、ここまで見てきた人たちは、1時間程歩きっぱなしということになります。そんな時に目の前にソファがあれば大抵の人は座ってしまうでしょう。そして静かに集中して雨の音や地面に当たる雨粒の音を反射する様子などといった場面ごとに少しずつ違う雨の表情を見ることができるようでした。それこそがこの展示室の狙いであると感じました。もう一つこの展示会の特徴をあげるとすると、映像の多さだと思います。とにかく多かったです。更に後半の方の主題歌が、作品ではフルで主題歌と映像を流してきます。それでもそこまで絵コンテや背景などを見せてしまえば、どうしても映像を見てしまうんです。あの場面はさっき原画で見たとか、色がよくてこんな風になるんだとか、今まで見ていたものまとめのような気分で見ることができました。特に一番最後には新海さんの作品全てをまとめた映像があり、ゴールに着いたときのような不思議な達成感を味わうことができました。結局全部周るのに3時間かけ、足はハットハットになってしまったのですが、本当に見応えのある展示会だったし、もう一度来たいと強く思いました。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 5

氏名

伊田光里

美術館名
いくつでも

北海道立近代美術館

一行目 私は2017年8月26日～10月15日に北海道立近代美術館で開催されたゴッホ展に二回行きました。1度目は家族と、2度目は部活の一員としてティンバイン・カレッジさんと北海道新聞社さんから取材と撮影を受けながらの参加となりました。近代美術館の正門近くの広場には動く様式の近代アートや彫刻がいくつかあり、その時点で、ああなるほど、今までいた空間とは別の場所に来たんだなと感じられます。記憶が不確かなのですが、2度目に学生として展覧会へ行ったとき、展覧室は明るく、普段とはかなり印象が違いました。ゴッホの絵を見ながらデッサンをし、という企画だったのでそのためとは思いますが、その配慮で手元が見やすく描きやすかったのを覚えています。さらに、部屋の中奥には背もたれの無い椅子が配置されていて、どの方向の絵も、じっくりと味わうことや、リラックした状態で鑑賞することができました。これは多分どの美術館にもみられる設備だとは思いますが、これらのあってとした配慮で、気持ち良く絵を鑑賞できました。

展覧室の一番最後にゴッホの「ポプラ林の中の二人」が展示されていました。私はこの絵が一番好きなのでよく覚えているのですが、色使いが優しく綺麗で、薄紫の使い方が巧みで、奥行きがあり、美しい余韻を残す作品でした。この余韻を持ったまま展覧室を出たので、その後のホールであるゴッホグッズ販売所では迷わずファイル2枚を購入してしまいました。今考えると、閲覧者の心を掴む配置の工夫もされているのだと感じました。

ホールは吹き抜けになっており、開放感に溢れた空間になっています。二階に上がると、一層の大きな窓に広がる外のソファとラウンジがあり、鑑賞の後の余韻に浸るには最高の場所であると思います。ここで展示されていて身に染みた絵について調べたり、思い浮かべて考え直したりができる、そんな美術館です。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 6

氏名

山本純輝

美術館名
いくつでも

北海道立近代美術館、東京国立博物館、500m美術館

一行目

美術館というのは、普段から頻繁に訪れる場所ではなく、有名画家の展示が行われる時にその作品を観る為に訪れる場所だと自分で決めていて、時間があれば行く。最寄りの美術館は道立近代美術館で、高校時代の画塾の近くにあったので1人でよく行きました。近代美術館では様々な展示がされ、世界各国の有名画家の作品に触れることができ、今となっては新鮮な表現を学ぶことができました。過去にモネ展が開催された時、大勢の来場者が訪れていて、有名作品の周りには人だかりができていました。外国の作品が展示されるとなると、訪れるのは日本人だけではなく、海外から来た人もたくさんいました。やはり有名画家の作品は、海を渡ってでも観たくなるものなのだと思います。つい最近ではゴッホ展がやっていて、その時は入場券を事前に購入しておかなければ長い列に並ぶはめに成る程の人気で、館内は大変混雑していました。ゴッホといえば「ひまわり」がとても有名なのですが、その展示会を機に、彼の描いた他の作品にも触れることができ、とても楽しかったです。近代美術館はそこまで規模は大きくないので、混雑を避けるために作品の展示法に工夫がされているように感じました。ゴッホ展の時は人が多いこともあって、学芸員の方はいくつも質問をされていましたが、終始楽しそうに説明されていました。中学の修学旅行で東京に行った時、上野駅周辺の博物館をまわっていたのですが、その中でも特に国立博物館は別格で、実際に行ってみると、とても大きかったです。門をくぐると広場があって奥に本館があるのですが、入口に入った時点で近代美術館とは規模が違いすぎる(比べるものではないと思いますが...)と思いました。入ると最初に目に入ってくるのは立派な階段で、ドラマなどで見たことのある階段だと気づき、感動しました。館内はとても静かで、人はほとんどいなく、想像していた雰囲気と違いました。本館では日本の歴史的な工芸品などが展示されていて、いつも観ていた西洋の美術作品とはまた違った味わいがありました。本館が広すぎるため、一時間では東側の一部しか観ることはできませんでした。今度行く機会があれば一日かけてでも全てを観てまわりたいです。札幌市の地下通りに「500m美術館」という地元の芸術家や大学生の作品が決まった期間中展示されるギャラリーがあるのですが、作品は全て壁に展示されており、横に500m続いている一見変わった感じの美術館です。ここに展示されているのは横長で抽象的な作品が多く、立ち止まって眺める、というよりは歩きながら横目で観る感じです。この美術館の良い

(続けて裏面に書いても良いです)

ところは、いつでも無料で観ることができる点と、作品の入れ換わる周期が割と短く、新しい作品に触れやすいところで、たまに自分の好みの作品を見つけると楽しくなります。最近描かれた作品が多いので、現代アートの先端的な作品にも出会えたりします。ここまで感想を述べてきた3つの美術館、博物館は全て展示方法が異なっています。近代美術館は人が自然に流れるように、順路に沿った展示。国立博物館は作品が劣化してしまわないように光を抑えた展示。500m美術館は横目に見る程度でも楽しめる展示。比べてみると、美術館は作品を生かすための場所で、作品の魅力、状態に合わせていくのだと改めて思いました。そういったことから作品の魅力がより引き立ち、美術館自体もよりよい空間となっていくと思いました。自分はもっと多くの美術館に訪れたいと思い、将来的には海外の美術館、特にルーヴル美術館に一度行ってみたいので、作品だけではなく、美術館とはどのような空間なのかを学びながら、様々な美術館に訪れてみようと思います。

提出日： 月 日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 7

氏名

那須 朋果

美術館名
いくつでも

北海道近代美術館、北海道芸術の森

一行目

私の親がもとと絵を見たりするのが好きで小さい頃から美術館へ行っていたのですが、記憶力が無く、この美術館ではこんなことがあったという思い出が数少ないです。そのような中、この数少ない思い出をしほりにしぼった結果、印象に残っていたものを何個か書こうと思います。まず高校生の頃に行った近代美術館の「アル・ヌーヴォー展」です。アル・ヌーヴォーのガラス製品が数多く展示されていました。その展示の中、奥で展示をしていた部屋に日が差し込んでガラスの花瓶に垂けて展示台上に色のついた光が反射してキラキラしていたのかとてもきれいだった記憶があります。偶然にもその部屋に人がいなく、うす暗い部屋の中に日が差し込んでいる様子は幻想的な世界に迷い込んだような風にも感じました。この展覧会をきっかけにドーム兄弟などのガラス作家が好きになったと思います。次に北海道芸術の森の「月岡若年展」です。普通の人物が描かれているものもあったのですが、妖怪や怪談といった不思議な話をモデルにした絵も多くそういうものが好きな私にはとても魅力的な作品ばかりでした。作品も良かったのですが、展示の説明の工数かたか今まで見たものと違って、その作品の書かれた経緯や作者自身の考えなどがわかりざん風になっていたり、タブレット風に加工されたものが設置してあって作品だけじゃない所でも楽しめるとても面白いものでした。情けない話ですが、美術館に設置されている文章はあまり読む気にならずとぼしてほうことが多かったので、その時はとても楽しく作品と並行して読みました。最後に、記憶に残っているものは「ゴッホ展」です。まず、ものすごく混んでいてまともな作品を見れずその上ゴッホの絵がいくつも見られず、ゴッホ展の宣伝ポスターにもゴッホの絵を押し出しているものだったのでどちらかというゴッホが影響を受けた作品や人」に関してのものも多く飾られていて、(美術の先生にこの話をしたらゴッホの絵も多くあったのでマシという話をされた)すごくからかりして歩いてまわっていました。しかし最後の展示ルームの出口の所に誰も人がいない作品があり不思議に思いつつ近寄っていくと遠目に見ている時は木漏れ日に照らされた森の中の絵で印象的にもとても柔らかな絵だったのか、近寄っていくにつれあのゴッホの豪快なゴッホゴッホとしたタッチが良く見えるようになり、作品の印象が荒々しく感じるという真逆のものを感してとても驚きました。これはすごい、なんでこの作品のすばらしさに誰も気がつかないんだ。この作品を見ただけでこの展覧会に来た価値があった。それほどのことを思うほどにこの作品には衝撃を受けました。しばらく見てるとたまに人が来て数秒見て

(続けて裏面に書いても良いです)

去つてしまつたのでそれを良いことに、何回も絵の近い所と遠い所を往復しました。
展覧会を出たあとのおみやげ屋さんにおいてあるブック関係の本にその絵の情報
をのせた本も無いし、ポストカードも無かつたので少しがっかりしましたが、あの作品
に出会えただけでも良かったなと思ひました。いつかまたあつほどに衝撃を
受けた絵をもう一回はで見たいし、衝撃を受けるまったく違う絵も見たいので
これから美術館や展覧会に積極的に行きたいです。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 2 9

氏名

梅津 椿有

美術館名
いくつでも

太陽の森 ティマシオ美術館

一行目

まずは外観、「太陽の森小学校」という小学校が新冠町にありました。今は廃校になり、そこに「太陽の森ティマシオ美術館」がたてられています。お城のような見た目が特徴です。小学校の校舎を再利用しているということで、トイレなど全体的なドア空間をみても小学校のルックが感じられます。私が行った時は雨が降っていて本来の景色を見ることができなかった。外にも彫刻がズラリと並んでいて、警備員さん、モアイ、ひつじさん、カワウソなどのオブジェがありました。かわいかったです。私がこの時点で思ったのは、あ、カオスなのかな。構えていくか、と構えていたのが、受付にいたのが、0%、1%、くんというのは近未来を感じました。あ、遠くないな、0%、1%、くんを受付につかうのか、新しいよう？ あ、みんなうなづいてるんだらうなと思いました。その0%、1%、くんの隣で猫ちゃんの書き物と見たら、ほめてた。その子の名は「ラスク」黒いマスクをしているような長毛のイタズラにゃんこで、この子以外にもあと2匹いるとうとう。猫スタッフ、もふもふ用員ということでもふもふさせていたみたいです。作品を鑑賞しての感想は、ティマシオは人間はどう生まれ、人類はどこへ向かうのかを追求している。この美術館には最大の由彩画があり、三由彩画の上下左右には鏡がついていて、全ての角度から楽しむことができます。無限です。圧巻でした。外の展示も含めた作品だと感じます。ぜひ行くのなら天気の良い日に行きたいと思いました。

外にプールがあったゼーゼルハウスがあります。そこも展示スペースとなっていて、ルネ、ラリックのガラス作品が並んでいます。とてもきれいです。ここにその0%、1%、くん、未来感がある。0%、1%、くんは必ず目を合わせて話してくれそうです。目を合わせるのを大事だと感じました。言葉で表すのが難しいので、みなさんぜひ行ってください。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日: 5月28日

私の美術館体験

学生番号

氏名

8 2 3 0

小川 けい

手書きする

美術館名
いくつでも

道立帯広美術館

一行目

正直、私は自分の住んでいた地元から出ることかめ、たになく記憶のある内に行った美術館でも1か所しかありません。道立帯広美術館に最後におとすれたのも約4年前(中学1.2年)と最近の事ではありませんが、その時に印象に残った体験についてのべていこうと思います。当時も将来にやりたい仕事というのが特になく、職場体験学習にて、なんとなく強いて気になったという理由で「学芸員の体験」を選びました。それまでに帯広美術館におとすれた回数も1.2回程度であったので、職業体験、作品の...はさらにも新鮮な感覚でした。当時ははたるの墓の展未会が催されており、一枚のイラストに何色もの線の具その色を鮮やかにぬりだした細かな作品を1人専ら作品のスキャンにおいては印象が強く残っています。授業内で「影は黒で描かれてない、黒の線の具を使ってはいけない」と美術教師に何度も言われていた事もあり、はたるの墓の背景イラストにも黒で影は描かれていなかった事など、心を打つような感動を覚えた記憶もありました。職場体験では、展示されてない絵画かどのようになっているのか、学芸員はどのような仕事をメインとしているのか、を主に話に聞き、普段、一般人では絶対見る事のできない空気、温度が厳重に保たれた部屋に入って、当時何とも無知な私に、「絵画の現状を保つには、全てにおいての関りが必要」「学芸員という仕事は自分がけがをしていても作品は絶対に守る責任がある」という印象をつける経験となりました。絵画というものをかきとくる事も、小中高の授業で習う事も一切なく、今に至るまでの体験として上記以外には特になにもなく、興味も正直全然なかった。職場体験学習で学芸員の仕事について体験(たことだけが私の美術館体験になります。そこで、美術館にいる人たちは学芸員と呼ばれている、学芸員として働くためには資格が必要という事も始めて知りました。ただし、ここでは、展示する事、作品を守る事についてが主な仕事だと聞かされたので、「企画を考えて展示する役割」がある事は大学に入ってから初めて知る事になりました。大学に入ってから、多くの作品を見たり触れたりして、視覚をあげた方が良く、という話を聞いた)、映像を見たりしてからは、秋田に行った時に美術館を知り、おとすれた心、たとか、東京、世界3大美術館に、その場所をおとすれた事があるならば、絶対に行っておきたいと感じるようになりました。道内でも帯広以外は行けなかったのが、旭川、釧路、函館、札幌、札幌の街をおとすれる、近くに行く機会があるのならば、行って本物を自分の目で見てみたいと思います。特に帯広では平面の作品展が多くかきとられているイメージもホースパイパイを通してあったので、立体系や線の具を使ったイラスト、絵画、調ではないものを目にしてみたいと感じます。

(続けて裏面に書いても良いです)

5/28 提出

提出日: 5月28日

私の美術館体験

学生番号 8 2 3 1 氏名 鈴木 彩音

美術館名
いくつでも

国立新美術館、道立近代美術館

私は博物館に足を運ぶことはあっても、美術館にはあまり行かなかった。かわい事は書けません。私が2つの美術館に行き、実際に絵を見て感じたことなどを、そのままと綴ろうと思います。

まず、記憶がある中で一番初めに行ったのは道立近代美術館でした。フィンセント・ファン・ゴッホの特別展に絵画好きの祖母と行きました。正直、私はのり気ではなかったような気がしますが、しかし結論から言うと、行って良かったと感じています。絵に直面すると、デジタルの画像からは読みとれないものたちがダイレクトに伝わり、これが絵画の鑑賞なのだ。初めての感覚に襲われました。筆のタッチはもちろん、その絵がもつ気遣いなど、実際に行ってみなければ解らない事だらけで、とても勉強になる点が多かった。知識だけは頭の中に取りましたが、その場で感じ、読みとってみて、これがあのゴッホなのだ。と体感した。1日でした。

そして最近行った美術館では、東京の国立新美術館へと行きました。この時は至上の印象派展 ビュールレ、コレクションをやっていた。ルノワールの「可愛いイレーヌ」が大好きな私に兄が受験終わった。褒美に東京への航空券を手配してくれ。向こうに住んでいる兄と一緒に行きました。兄は美術にまったく興味が無いのに、私が好きな事に付きあってくれて嬉しかったのを覚えています。「可愛いイレーヌ」を目的として行ったので、多くの素晴らしい作品たちに囲まれた空間はとて幸せに満ちていました。モネやマネ、ドガ、他にもドラクロワやカールなどの印象派が発展していく過程にあるものたちまで展示されていて、わかりやすい展示方法であると勉強になりました。やはり、「可愛いイレーヌ」が私の中で最高とも言える作品で対面したときはとても感動しました。まっもの一本一本が巧みに言葉を伝えています。肌や髪、洋服、おはからイレーヌのまつげやわらわら

(続けて裏面に書いても良いです)

が伝わり、そして、違う時代に生きていた イレーヌであるが、少しだけ
彼女のことがわかった気がした。ルノワールが感じとった
イレーヌの雰囲気、この時代に生きる私にまで伝染する
というのは、言葉では簡単ではあっても、すごい技量があった
のだと、改めて理解することができた。そして、この素晴らしい
作品を残したルノワールに影響を与えた人や技法など、
同じ空間に並べられていることで、ルノワール自身のことと垣間見
た気になることができた。全ての作品を3時間ほどで
鑑賞し、その日は宿泊先でも余韻に浸りました。

この2つの美術館を通じて私は美術の再認識をすることが
できたと思う。実物との対面はとても大切であると感じること
ができたのは、これから私の大きな影響を与えてくれることであ
ろう。これから頻りに美術館を訪れ、自分の認識と感性を
成長させていきたいです。

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 3 2

加藤 綾

美術館名
いくつでも

札幌芸術の森

一行目 私は高校生の頃授業の一環として芸術の森に行く機会が数多くありました。そこで感じます大きなことは、美術館の雰囲気は展覧会によって全く違うということです。当たり前だとは思いますが前提にあると分かっていても本当に全く違うのです。これは、同じ美術館に何度も行っているから気づけたことだと思います。それぞれの展覧会にそれぞれの魅惑があるというのはすでに感じてきた感を入りませんでした。私が行った展覧会の中でも、それをより感じたのが「進撃の巨人展」と「スターウォーズ展」です。どちらも「原作」のあるもので、設定資料等が展示されており同じような展示になってしまうのならば最初に私は思っていたのですが、全然違いました。そもそも、このような「原作」のある作品の展覧会は、もうこの作品を知っている、という気持ちがどこかありました。ですが、展覧会に行くとその作品を知ることによって、より楽しみを感じる事ができました。展覧会に行くと、その作品の中に入ったような、そんな体験をすることが出来ます。特にこれは、映画を見た、漫画を読んだだけでは感じられません。「進撃の巨人展」では巨人が実際にいたり、壁が壊れていたり、漫画で見た武器が具現化されていたりと進撃の巨人の世界が再現されたような感じで、明るい照明で楽しい気持ちになり、思わず声が出てしまうような、そんな展覧会でした。VR体験もして一緒に巨人と戦ったり、今の美術館はこんなにも出来るんだなあと思った記憶があります。一方で、「スターウォーズ展」では、作品を制作するにあたってそのイメージ画を油絵で描いたものが何枚も展示されていたことにまず驚きました。映画の中で使われた衣装の再現がほんやりとした照明の中に1つ1つ並べられていて、じっくりとその作品と向き合ってみることが出来ました。「進撃の巨人展」ではその展覧会全体が「作品」だという感じがありましたが、「スターウォーズ展」では展示してあるもの1つ1つが「作品」だという感じでした。「スターウォーズ展」は映画の内容は近未来的ですが、展示会は私のよく知る「古き良き美術館」感があり不思議な感覚でした。でも、どちらも出た後に、原作を見直した」と

(続けて裏面に書いても良いです)



思う気持ちはこちらも変わりませんでした。家に帰って見直しましたが、
より、その作品を楽しむことが出来たと思います。この2つの展示会で
「美術館」自体の本来に気づけたと思います。照明の色一つで
作品に対する印象は大きく変わるし、一つ区切られた空間が
あれば「特別な場所」という空間が出来上がるし、飾る高さ
だって違えば見方や見る方向が変わりますから、それが本来だった
私は思います。見終って出た後に、「見たえがあって充実してたね」と
ため息が出るような展示会ができていればそれは「良い美術館」と
いえるのではないかと私は思います。

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号 8 2 3 3 氏名 越浪 実柚

美術館名
いくつでも

安田律子漆絵展 (富良野)

一行目

〈はじめに〉

私は、高校生のときカシュー(漆)を使用した作品をつくったことがあります。この漆絵展での作品には「本漆」を使用したもの、「カシュー」を使用したものの2種類があり、その2つの作るにあたってのちがいというのにも関心することができた貴重な体験でした。作品展の体験、魅力を説明するにあたり、まずはこの2つのちがいについて説明させて下さい。

〈本漆・カシューのちがい〉

(共通点: 作り方の工程が同じ) ①下地塗る→②漆/カシューを塗る→③やすりをかける→④2,3をくりかえす(漆にやすりの番号を細かくしていく)→⑤仕上げ(ここだけちがう)

ちがい	漆 ... 天然	カシュー ... 人工
色	自分で色をつくる必要性	元々様々な色のパリエーションがある
乾燥	湿度が高いところで乾く	自然乾燥
削るとき	固い	比較的柔らかい
塗るとき	液体がずらず、細い線をかける	液体の粘度が高い、細い線がかけない
肌	多くの人がかぶれる	漆アレルギーが少なく

など

安田律子さんは、漆の方が扱いやすい(削るのが固いなど)そうです。

〈作品について〉

富良野文化会館2階展示ホールにて展示されており、作品数は40点ほど。8割は平面作品でしたが2割は小さな立体作品でした。漆絵展、ということで「漆を使った絵画作品」が多く、工芸作品というより絵画鑑賞に近い印象でした。(安田律子さんは教育大札幌校出身でいらっしゃいます。) 作品全体のテーマとしては、「北海道の樹木や草花など、自然の中で出会った何気ない風景やささやき」だそうです。作品の題名も「負草」、「杜の声」、「唄き〜大葉菩提樹」などがあり、ふつうの絵画とは違った漆絵の魅力を感じました。漆ということもあり、背景が黒のものが多いです。黒の中に、鮮やかな色の草花が描かれているのですが、漆やカシューの鮮やかな色は私たちの使っているエタノールに無限の色数があるわけではありません。限られた色数で、草花・自然の美しさを表しており、工芸に興味がなくとも見たら圧倒されるにちがいありません。

(続けて裏面に書いても良いです)

うらへ →

<美術展として>

会場は富良野文化会館の2階展示ホールで、実際はちゃんと展示場で開催された方が、作品を良く見られるのになとも思ったのですが、あのこじんまりとした展示ホールに、あの作品が並んでいても私は圧倒されました。場所よりもまずは美術作品の魅力を出すことが美術展として大切なことだと気づかされました。

<作品について2>

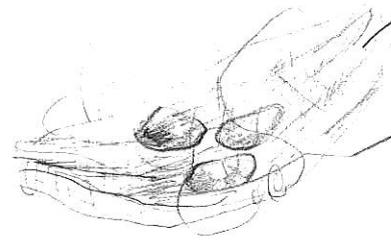
漆作品の表面を美しく歪みなく仕上げるには、下地から丁寧な作業がひつきます。できる、どの作品も表面のてこぼし、相はなくすごく美しいです。元々手先の器用さがあったとは思いますが、何十年も漆の作品と関わっていることも理由の一つなのかなと感じました。

①「夏草Ⅱ」漆



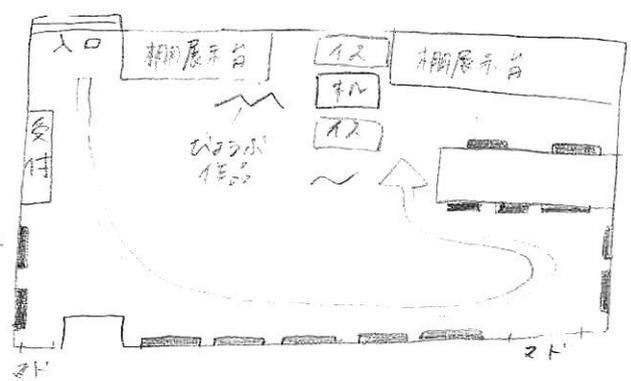
- ・背景黒
- ・貝で描かれた雨?の表現
- ・緑~黄の美しいグラデーションの草
- ・青で表現された草花
- ・所々アクセントである赤のフボシ

②「ゆらり」漆



- ・蚊張? 寒冷紗をつけてつくられた器(赤色)
- ・石に漆ぬり(黒)
- ・ひも(赤)

これらの2つの作品は特に印象に残った好きな作品です。他にも、漆(カシコ)と鏡を組み合わせたものもあり、工夫も多く発想的でした。



ぐるりと順番にみていく際、じんわり表情がゆたかな作品になっていく感じがありました。

<まとめ>

美術館(美術展)に行った経験は本当に良い体験として自分の制作に生かされると思います。私は絵画だけではなく工芸にも興味があることから、今日の漆絵展という工芸と絵画のくみあいはすごく良い体験でした。いままで一番印象に残っている美術展です。また、今までイメージしていた美術館、美術展というものは、都会にしかない、都会でしかすばらしい作品がないと考えていました。でも、都会ではなくても、小さな会場にもすばらしい作品はありました。これからは、地方の美術展にも目を向けたいですし、もちろん札幌などの有名な作品展にも行く機会を増やしていきたいです。

提出日: 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 3 4

佐藤 亮汰

美術館名
いくつでも

国立美術館 長泉院附属現代彫刻美術館

一行目

大学が決まった今年の春、3月の末に友達と2人で東京へ旅行に行きました。一番の目的は他にあったのですが、1日貰って美術館やギャラリーをまわったのですが、やはり国立美術館に入っていたビュルレ・コレクションが特におもしろかったです。

中に入り、最初に思ったのはとても広いという点でした。単純に各展示空間がとても広い上にそのブースが10個以上もあり、すごい作品数だな、と思いました。入り口から出口にかけて、古い宗教画テキストのものや、偉人風人物画に始まる印象派やキュビズムなどが登場する順に並べられていて、その時代ごとに変化していく人々の絵の捉え方がわかるようになっていて勉強になりました。

そういった点で見ると、強く印象に残っている作品は、カミーユ・コローの「読書する少女」です。展覧会の中でも特にピックアップされている作品ではあったのですが、その絵が描かれた背景が面白いと思いました。ただ本を読む女性の絵という日常のひとコマを切りとったような絵で、今ではよく描かれるわいとありふれて見える構成の絵ですが、これが描かれた当時は人物といえはモデルはポーズを決めて描かれる姿勢をとるものだったらしいです。「言われてみれば」ではありましたが、確かに、女性の服の崩れている具合や、姿勢をとることながら、彩度の強弱のつけ方や、影の色合いなどがとても気を抜いて休憩する女性のまとう空気が見える作品だと思いました。

逆に作家の想いに、ではなく、視覚的には、と目を惹かれたのが、エドワード・マネの「ベルヴェの庭の隅」でした。同じ印象派の絵で、クロード・モネの「陽を浴びるウォータールー橋」は、全て白に近い色を並べて霜に包まれるような景色を描きましたが、マネの庭の絵は彩度、明度、共にコントラストの強い色を混ぜるのではなく、ほぼ並べたように画面に置いて描いた絵で、画面全体が引き締まられる絵でした。絵をよく見ると、強いコントラストから、庭に差し込む陽の光は正午頃の強いものと思われれます。ホワイトバラニスはあたたかめではありますが、全体は青や緑の寒色が多くなっていて、その中の画面手前の赤い花がよく映えています。青を見れば緑が映えていて、緑を見れば赤が映えていて、赤を見れば青が映えて見える。見れば見るほど魅力が際立ってきて、視点が絵の手前と奥を行ったり来たりする、見ていてとても楽しい絵だと思います。

他にもモネの睡蓮の池の絵など、有名な作品も多く、本物を時間をかけて見るから分かってくるようなことが多く、良い経験になったと思います。

このときに美術館に行けたタイミングでは、打て自分自身の中身が高校生のままで、

(続けて裏面に書いても良いです)

大学生になつてからよく言われる。「自分は何故作品を作るのか」みたくなところについて考えたことがなく、絵を見ると主にそこまでの作家が何を想つて絵を描いたのか、というところまで深く考えられなかったのが残念です。これからの四年間も、自分の学習の進度に合わせた鑑賞ができるよう、何度も美術館に行きたいです。

東京旅行で行ったもう一ヶ所の美術館は、目黒の長泉院附属の現代彫刻美術館です。全体では石彫がメインの美術館で、人間がモデルのものも多くありました。石を削って作っているものなのに、人物彫刻は、人の肌のやわらかさを想像させるほどリアルな作品もあり、素材の質感を超えてリアルな表現が、人の等身大で行われているのはかなり迫力がありました。

人物以外に、抽象的な作品もありました。デザインの面白さで、「なんてこんなもの作ったんだろう」と考えさせられるようなものや、構造は単純なのに、最後の表面仕上げで魅せられるもの、またどんな技術をつかってこの形を再現したのか想像がつかないものなど、色々な作品があって面白かったです。

立体の美術館に行つたのはここが初めてだったので、3次元作品だからその本物を見る面白さを実感できたことが大きかったです。作品そのものだけでなく、それを包む空間が意識させられるような見方は写真で見るとも強く感じたと思います。

私の美術館体験

手書きする

提出日: 5月28日

学生番号

氏名

8 2 3 6

中島 楽人

美術館名
いくつでも

モエシ沼公園

モエシ沼公園へ初めて行ったのは、高校3年の夏でした。何故そんな時期に行ったのか、それにはモエシ沼よりも深い理由があるのです。中学生の頃、美術の授業でイサム・ノグチ氏について触れる機会がありました。そのときにモエシ沼公園の存在を知り、「こんなでかい芸術的な公園があるのかー、行ってみたいなー」なんて思うようになりました。北見の人ということもあり、行く機会も無く高校3年生になりました。そんな中、予備校目的で訪れた札幌で目にしたポスター「札幌国際芸術祭」行きたい欲が爆発しました。これは行く。さっさとすぐさまグーグルを開いて経路を検索。環状通東駅へ行ってからバスに揺られ、チャリパークを引き取りながら、そしてひょこ頭を出すガラスのピラミッド。(HIDAMARI)公園内に入る前からヤリヤが止まりません。しかも入場無料だということです。このテカイ芸術の魂のような空間は実質美術館だと思ってるので、無料で見れる美術館ということになります。良心設計。そうしていき公園内へ、入ってみると実感します。この広さ。メインエリアまでが遠い！しかしその遠さが、早く作品を見たいという中島の心をより高ぶらせるのです。学生会館にチェックインする時間を考えると、見れる時間はざっと1時間半といたところ。急ぐ足にチャリパークという柳が絡んできます。そんなところに現れたレンタサイクル。2時間100円。これを入場料と考えれば安い。借りるしかないので早速借りました。すると受付の人がチャリパークから画板を預かってくれました。この解放感、ありがたや。後々痛感しましたが、このとき自転車を借りていなければ、全ての作品を見られなかつたです。そこであれば消化不良のまま大学生になっていたことでしょう。自転車をゲットした中島は笑顔で園内を激走。(安全に) 先ずはガラスのピラミッドへ、遠目から見てもわかるその美しさ。末次先生も言っていました。テカイものを見ると人はビクビクするのです。想像以上の大きさ。そして鳥のフン一つ無い。ガラス輝きは中島にクリティカルヒット。やはり作品は生で見るとか一番です。天気が良かったのもあってか、写真を撮れば素人の中島でもプロ並みのものが、被写体が良いからなのですが。ピラミッド内に入るといっても新鮮です。まるで作品が自分と一体になっている気分になります。ピラミッド内にはなんとレストランとカフェもありました。カッコイイトシャツが売ってましたがお金が無く断念。次は絶対に買ってやるぞ!

お次は「プレイマウンテン」へ。人が山に登る理由は「そこに山があるから」と言う

(続けて裏面に書いても良いです)

のは有名ですが、中島も同じです。「ここには山があるから」登ります。猛ダッシュ。しかし思
たよりも頂上まで木遠い。芝生でピシッピシッしてるカラスを横目に頂上は。頂上は
見晴らしが良く、公園全体を見渡せた。軽食を摂っている子もあり。ここでピクニック
するのもいいな。なんて思ってた。すると木に囲まれているところから水柱が。木の
高さを越える噴水がジヤストなタイミングで発射。今度は目の前で見ようか。

お次はテカイ2つの谷、ミュージックニュルというものでこのオブジェの前で演奏会
ができるらしい。音科の皆さん、チャンスですよ！ お次は「トトラマウント」。

ざっくり説明すると、3本の金属の棒が支えあって三角山を作ってます。テカイ。
棒の足元には水が流れておいてなんとモイロイ、パシッパシッしたい。表面も
またモイロイなんです。凹凸があるんですが、その反射具合が独特の模様
を生んでいます。晴れた日は最高です。周りの山から少し離れたところには
あるので、青い空に銀と白の二本線。誰が撮ってもこれもまたプロ並みの
写真になります。LINEのホーム画面にしてみました。最後に「モエシ山」。

プレイマウンテンよりも山です。山。「ここには山があるから」登ります。急な斜面
でしたがあえて階段からは登りませんでした。札幌国際芸術祭の期間
だからか、山に大量の自転車が置かれてありました。芸術的。自転車の間
を通りながら頂上へ。プレイマウンテンの高さを越してもまたその頂上へは
着きません。汗をかきながら登ってる間は気持ちが良い。フロー状態。

頂上の景色は言わずもがな良い。ピラミッドもちっちゃく見えます。住みたい。
他にも色々作品はありますか。有名ところを紹介しました。次回はTシャツ
購入！ モエシ沼芸術花火も行ってやる！ 以上で美術館(公園)体験を

終わります。

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

氏名

8 2 3 7

佐々木 佑真

美術館名
いくつでも

木田金次郎美術館

私は、普段あまり美術館に行くことがありません。なので、この課題をどうやろうかととても迷いました。でも、一つだけお世話になった地元的美術館があるのでその事について書こうと思います。

名前は「木田金次郎美術館」で、私の地元である岩内町の港の近くにある美術館です。館内には木田金次郎さんが描いた抽象的な油絵が飾られています。何故この美術館にお世話になったかというと、中学生の頃からそこで開くコンクールに参加したり、仕事体験で2日ほど館内の仕事をさせていただいたからです。また、高校では2階の部屋を借りて美術部の絵を展示していただいたり「夏休みワークショップ」という子どもや大人の方とふれあいがからコップやお皿を作ったり、カレンダーを作ったりなど、様々な体験を美術館でさせていただきました。

高校でも職場体験学習があり、また木田金次郎美術館で仕事を体験させていただいたので、その日は団体のお客様が入っていたので木田金次郎の作品を説明するという大変貴重な体験もしました。また、ホームページにある「どんぞ丸」というブログには中学や高校でいくつか学校のことを記事として書いてくれたこともありました。

本当にたまに別の美術館へ行くこともありますが、やはり地元にある小さいころからなじみのある木田金次郎美術館が私は一番大好きな美術館だなと思います。

木田金次郎さんはよく岩内の風景やリンゴ、バラといったものをよく描きます。どれもやはり抽象的に描かれていますが、色づかいがリアルな色に近くて遠くから絵を見てもリアルに描かれているように見えます。

私の美術館体験

手書きする

提出日: 5月27日

学生番号 8 2 3 8 氏名 漆崎 未空

美術館名
いくつでも

創玄展・北海道学生書道展 旭川校書道展

一行目

全国規模の学生から一般の部まで幅広い年齢の方が出品する創玄書道展に高校1年生の時に東京に行ったことが思い出に残っている。道外の展覧会に行くのは初めてのことで。私は書道部に所属していたので部活動で書いたものを出品した他に、習い事でも書道をしていたのでそこで出品したものが、賞に選ばれたので、部活動の仲間と顧問の先生と行ったことがきっかけである。国立新美術館に展示されており、全国各地からの作品が飾られているので、会場も広く、作品を全部見るのはとても大変なことだと感じた。だが、それ以上に今まで見てきた北海道の展覧会とは比べものにならないくらい作品の多さ、そこから学べることがたくさんあった。学生部の作品は小学1年生～高校3年生までで、賞に入選した作品が展示してある。入選するには、学生部で1番の文部科学大臣賞、など次々と上位の作品が並んであり、生で、身近で見ること、(文字)文字の形、潤筆の出方であったり、作品のまとまりを観察することができた。その時、文部科学大臣賞に選ばれたのは、今北海道教育大学岩見沢校の書専攻の先輩の方で「染教論」という臨書の作品だった。まず同じ北海道の人が最高賞に選ばれていたことが、すごいと思ったり、尊敬する人だと感じた。そして、染教論の特徴をしっかりとらえた横画が細く、縦画が太く力強いもので、その中に本人の人格が現われている、うまいの一言だったし、衝撃を受けたことを覚えている。その他にも私が書いたことのある作品からどうでもないもの、作品の構成や、地方によつての作品の書風の違いを感じることができた。臨書作品の他にも、創作があり、どれもレベルの高いものだったことを覚えている。私の作品も中に飾られていたが、まだ表現力の未熟さを感じたし、足りぬものがたくさん見つかった。また一般部の作品も見に行ったが、まだ高校1年生ということもあり、難しかったが、今となっては、他の書道専攻のある大学の人の作品や、お世話になってきた先生方の作品をきちんと見て、研究したかったと後悔している。ただ、その時でも大人の作品の迫力が感じられ、いつかこのようなものを書いてみたいと思ったのは覚えている。この創玄展を通して、北海道以外の作品がどのようなものが、自分の作品作りにプラスになったと思う。また必ず見に行きたいと思った。

(続けて裏面に書いても良いです)

提出日：5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号 8 2 3 9 氏名 坂本 晃基

美術館名
いくつでも

北海道立釧路美術館 (他、札幌近代美術館、釧路国立近代美術館)

一行目

私の今まで行って来た中で最も記憶に残っている美術館は、北海道立釧路美術館だ。この美術館は、釧路漁港に開けて建てられた2階造りの建物であり、屋上テラスからは釧路の海が一望できる。中庭には、大きな鉄製の球状の作品が鎮座している。そして、この美術館の2階には、私の一番お気に入りの場所である喫茶店がある。その店から漏れたコーヒーの匂いが館内中を優しく包むのだ。その空間は自分にとって至福の場所であった。このように書くとき、先ずかち私に釧路市に在住していることを説明した方が良かった。私は釧路市から20キロメートル離れた中標津という所に住んでいた。中標津市には美術館がなく、芸術作品と触れ合うためには釧路市まで来る必要があった。だから、釧路へは6ヶ月に1回だけ行く機会があった。最近では、大分県釧路美術館で毎月のように行われる特別展示会へは行くだけでなくの方が多かった。ある日、美術館の特別展示として『無言館（長野県にある第二次世界大戦中の日本の戦没画家の作品を展示している美術館）の作品が東京に上陸した。この展示会にチラシを見たら、私は村松さんが、どうしてこの展示会に行きたくなったのかと聞いてみた。前週、釧路まで来て、この展示会に行きたいと申し込んだ。この展示会を見に行きたいと思った。

この展示会について深く話してみたいと思う。

- 「無言館～遺された絵画展～」開催期間：2016年4月28日～6月21日

展示スペースに入るとまず目に付く作品は、太田章の日本画「妹・和子の像」だ。木の蔭にしゃがみこんでいる少女の顔である。作品の下には作者の親友・真と書かれた、没落目と死別が書かれた手紙が添えられている。

(続けて裏面に書いても良いです)

河和フツョンによると、木田章は現、東京美術大学を卒業し、23歳の時に戦死したとされている。彼は戦地へ行く前日まで自身の妹絵を木の下のしらかばの木の根元に描いていたという。

※図1

順路を巡ると、興福武の「緋のそりする婦人」が見えてくる。彼と彼の作品の河和フツョンには深い書かれい。興福武。現東京美術大学絵画科卒。

昭和20年8月8日ルソン島、ルドン山にて戦死。享年28歳。

この絵は一番下の妹絵である。絵を描いて出征し、妹は間もなく満死。その報告を戦場で受け取った興福武は

半狂乱になったと語った。『この河和フツョンを読んだ私は、こんなにも酷な現実があったのかと怒りと悲しみを覚えた。

そして展示を終盤にさしかかると、視界に入る風景画片桐彰「街」。『大正11年、昭和17年に京都高等工芸学校卒業後すぐに入隊。昭和19年7月28日、マリアナ諸島にて戦死。享年21歳。残された妹の思い出：「只も戦地へ行く直前、『オーケストラの少女』という映画に連れて行ってくれました。映画が終わると、戦争の悲しさを考えながら二人で歩いた夜のお天は父の背中に忘れられませんでした。』

そして私はこの作品を最後に展示場を後にした。

展示場を出て一番最初に思い出したのは、家族の顔だった。そして現代、戦争の無い国に生まれたことへの安心感を味わった。それと同時に悲しみ、軍国主義国への怒りを感じた。

この作品展で何か。大絵は「自画像、家族のポートレート、思い出の風景」だ。彼らは決して戦争への出兵という状況から目をそらすために絵を描いていたのではなく、思い出のあるモチーフを描くこと、自身の人生へのけじめをつけていたのだと思う。彼らの描いた絵を見ると、どの絵も「俺の人生を見てください」と言わんばかりに自己主張してくるのだ。そして、どの絵にも一縷の悲しみ、不安そして情熱が垣間見える。

鑑賞という行為は渡れを伴うものだが、この展示会では体力的にも精神的にも渡れた。それはどの作品にも、その人の一生を表すエピソードがあり、その作者の心を思うと心が痛むからだ。そして長野県にある美術館を訪れることができたのは、ゆくりと時間をかけて100の作品と向き合えたことだと思う。

提出日： 5月28日

私の美術館体験

手書きする

学生番号

8 2 4 0

氏名

杉本 菜里

美術館名
いくつでも

ミュシャ展 近代美術館

一行目

私が今まで美術館に行ったことで記憶に残っているのはミュシャ展です。そのミュシャ展は北海道立近代美術館で25年ぶりに札幌で開催されました。2014年当時、私は中学3年生で美術部に入っていました。美術部内の活動は放課後の活動や学祭展示、スケッチ以外にも美術館へ行き作品を鑑賞するということがありました。そのときの私は任意での参加だということ、また多少のお金がかかってしまうということに参加することは全くありませんでした。今思うととてももったいないことをしていたと思います。部活動も3年になり学祭に向けての準備を進めているとき、3年生にとっては美術部として最後の美術館鑑賞のチャンスが当時やっていたミュシャ展でした。最後くらいは、という軽い気持ちで私は活動に参加しました。

鑑賞当日、集まった人たちが美術館の中に入り作品をみはじめると、私はその絵に圧倒されました。実物と写真でみるものは全くもって違うということはこのころ初めて感じたことを今もおぼえています。展示されていたのは有名なポスターや構想画、そして当時はそのようなことをミュシャがしているとは知らなかったのだけれど、商品の箱のデザインしたものや飾りなどは幅広く展示されました。ポスターデザインのやわらかい色使い、細かく描かれた美しい模様はミュシャの特徴だと思います。1つ1つの作品の前に立ち、持ってきていたメモ帳にどんなものをモチーフにしているのか、色や模様の細かいところはどんな感じなのかということをおぼえてきました。結局美術部としての活動で来ていたので集合時間がきてしまい最後の方はかけ足になってしまいました。充実した時間を過ごせました。

その後の中学の間は受験ということもありなかなか美術館に行く機会はありませんでしたが、高校に受かったあとはまた行くことができるようになりました。改めて、本物と写真ではその場で感じて観るということの感動の差がまったく違いました。ミュシャ展はその当たり前のことを私に教えてくれた展覧会でした。今後も自分のためにも多くのものを鑑賞したいと思っています。

(続けて裏面に書いても良いです)